

小児科診療 UP-to-DATE

2014年7月30日放送

小児医療における育児の重要性

横田小児科医院
院長 横田 俊一郎

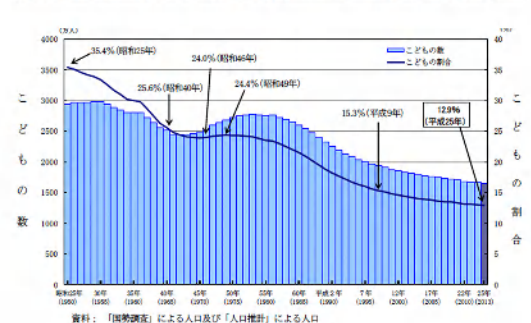
1. 小児をとりまく社会の変化

日本では少子化が進み、小児人口比率は13%程度と老年人口比率を大きく下回るようになっています。一方で、予防接種の定期化が進んだことなども影響して重症疾患が減少し、小児の死亡率が世界で最も低い国の1つになっています。

しかし、日本の小児がそれだけ健康になったかということ、様々な問題もあります。2007年にユニセフが発表した、先進国に住む小児の「幸福度」に関する調査では、OECD加盟25カ国の15歳児の意識調査で、「孤独を感じる」と答えた日本の小児は約30%と、2位の10%を大きく上回り、飛び抜けて高かったことが示されています。また、小児科の外来でもいじめや不登校など、心の問題で受診する小児が増えており、児童相談所では虐待の通告が激増していて、小児の心が健全に育っていないのではないかという指摘がなされています。もちろんこれは社会全体の問題ではありますが、育児の問題と、言い換えることもできると思います。

育児が難しくなっている要因として、少子化のために子どものことを知らないまま親になり子育てをしなければならないこと、地域社会が崩壊し周囲に助けてくれる人が少なくなったこと、一方で育児書や育児雑誌に頼り切ったマニュアル育児をせざるをえないことなどがあげられます。更には母親の就労が増え育児に専念できないこと、子育て世代の貧困が増え育児に様々な支障をきたしていること、社会全体が育児を正当に評価してくれないこと、なども大きな要因です。

日本の子どもの割合の経年経過



2. 小児科の外来の変化

小児医療の現場ではありふれた軽症疾患、些細な症状で受診する患者、予防接種や乳幼児健診

で来院する患者が中心となっています。小児や小児の病気に関する知識が乏しいために、単純な心配だけで受診する養育者も多く、また、心配の陰に育児に対する不安が隠れているケースも少なくありません。養育者が過度に神経質な性格であったり、出産後のマタニティーブルーが背後にあったりする場合があります。たわいのない相談に思えても、それを放置すると育児不安がさらに膨らみ育児そのものがうまくいかなくなり、時には虐待にまで進んで、子どもの心の健全な発育にも影響を与えるようになります。

だからこそ、小児医療の現場にいる医療者は養育者の不安に耳を傾け、小さな不安でも探し出して、それに応えることが大切だと考えています。このことは近年の小児医療に欠かせない側面であり、極端に言えば「小児の外来医療は育児支援そのものである」と言っても過言ではありません。乳幼児健診や育児相談だけでなく、ありふれた感染症や予防接種で受診したときにも、いつも心がけておくべきことだと考えます。

15年ほど前に行われた乳幼児をもつ父母へのアンケート調査では、育児に関する相談相手として小児科医を選ぶ率は少なく、育児雑誌や育児書、祖父母や友人を頼りにしている、という結果が示されていましたが、その後状況は大きく変化しており、小児医療関係者への期待は高まっていると考えられます。

私が活動している日本外来小児科学会での小児科医へのアンケート調査でも、「現在あなたの診療所では、特別に興味をもって、あるいは必要に迫られて、取り組んでいる診療や研究活動はありますか？」という質問に対し、「育児支援」と答えた人が1996年には12.3%だったのに対し、2012年には25%に増加していました。

3. 育児と育児学について

育児とは「非力な子どもを保護する一方、子どもの社会的自立を促す営み」と日本大学小児科教授であった馬場一雄先生は述べています。子どもたちを、身体的、精神的、社会的にすぐれた人間に育て上げることが育児の目的といえます。育児は養育者と子どもの特性、家庭的背景、文化、伝統、生活様式などを背景として行われていて、日々変化しています。そのために科学的な根拠を見つけることが難しいことも多く、また客観的に評価することも容易ではありません。育児が小児科学の中の一分野として取り上げられにくかった理由が、そこにあります。

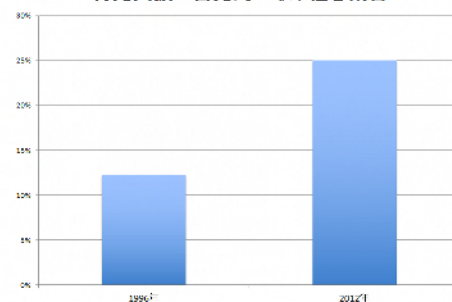
子育てを難しくしているもの

- 少子化
子どものことを知らないまま親になる
- 地域社会の崩壊（相互扶助の関係の崩壊）
周囲に助けしてくれる人がいない
- マニュアル育児
育児書や育児雑誌に振り回される
- 母親の就労、父親の過重労働
- 子どもの貧困
- 社会が子育てを評価してくれない

小児科外来の変化

- 受診者の減少（小児人口の減少）
- 重症感染症の減少
- こころの問題の増加
- 健診、予防接種、事故予防の重要性の増大

育児支援に自発的に取り組む割合



外来診療の中で育児に関する相談を受け、アドバイスを与えるとき、それが正しいのか、本当に役立っているのか不安に思うことがあります。先輩から教えられたこと、育児書などに書かれていること、自分の経験などをもとに相談へ対応していますが、育児を科学的に考える必要性を強く感じるものが少なくありません。しかし、書物を読んでみても、明快に答えてくれるものはあまりなく、小児医療が小児医学に裏打ちされて行われているように、育児を科学的に裏付ける学問体系、すなわち育児学の必要性を感じずにはいられません。もちろん、育児の問題すべてに医学的な関与が必要なわけではありませんが、重症度や発生頻度が高く、障害を残す可能性が高い問題については、科学として積極的に取り組む必要があるはずです。

また、育児学は心理学、保育学・教育学、家政学、文化人類学など多くの領域で取り組まれていて、成果が積み重ねられています。それぞれ立場が違い、取り組み方も異なっていますが、医学以外の分野の研究者の考え方にも目を向けることも必要です。

4. 外来医療における育児支援の実際

小児科の外来で育児支援に取り組むためには、小児科医だけでなく、そこで働くスタッフが丸となって相談を受け、的確に対応することが重要です。そのためには挨拶や対話を勉強し、相談しやすい雰囲気作りを心がけなければなりません。また、相手の立場に立って考えること、保護者が何を心配しているのか、なぜ心配なのか、をきちんと把握することが大切です。わかりやすくアドバイスを与え、保護者の話をよく聞き、保護者の考え方をできるだけ優先して勇気づけることが問題解決に繋がっていきます。

また、医療関係者の何気ない言動が不安を助長していることもありますので、保護者に不安を残さないようじゅうぶん配慮しなければなりません。納得できる解決法を与えられないことも多いですが、今回の相談機会を設定するなどして、保護者に不安を残したまま相談を終わらせないようにすることも肝腎です。小さな不安の蓄積が育児のつまずきにつながることもありますので、必要があれば専門家に紹介していただきたいと思います。

5. おわりに

育児支援が小児医療の一分野として、なくてはならないものとなっていることをお話してきましたが、小児科医としてどのような思いを持って、関わっていくべきかを述べてみたいと思います。

慈恵医大小児科教授であった前川喜平先生は、育児に関わるには「人間関係の存在を前提として出発し、そこにみられる現象を記述するソフトの科学、人間学、が必要なのではないか」と述べています。該当する回答がなければ養育者の話をよく聞いて一緒に考え、助言をし、実行するのは親の自由選択に任せる。自由度の広い問題こそ養育者は選択に困りますが、そのときにソフトの科学の考えに基づいて相談・助言し、養育者の決定に対し「それでよい」と言ってあげられること・・・が大切である、と説いています。経験やエビデンスも確かに必要ですが、このように養育者とともに考える作業こそが、育児支援の醍醐味のように思えます。

また、育児に関する相談には、小児科医だけでなく、看護師、保健師や保育士・栄養士、地域の子育てグループや子育て支援センターのスタッフなど、多くの職種の人たちが関わっています。

育児不安にどう対応するか

1. 相談しやすい環境を整備する
2. 育児不安の要因を考える
3. 科学的に、わかりやすく説明する
4. 保護者の考え方を優先し勇気づける
5. 必要なときには紹介できる
(不安を残したままにしない)

このように多くの人たちとの協働作業が必要となるところが、育児支援のもう一つの重要なポイントです。育児はさまざまな要素を背景としているので、異なった角度から見直すという作業が、実はとても効果的なのです。小児医療はもともと地域社会との関係が深い領域なので、育児支援をきっかけに、多職種の人たちとの協働の輪が広がっていくことが期待されます。

最後に、育児が小児医療に携わる人に楽しみを与えてくれるという点も強調しておきたい

と思います。育児は人間の営みの中で、おそらくもっとも楽しいことの一つです。そこに関わることができるのは、小児科医としての大きな喜びです。若い小児科医の皆さんにも、ぜひ育児に興味を持っていただき、その喜びの一端を感じていただきたいと思います。

育児について連携が必要な機関

- 他科の医療機関
- 総合病院
- 保健センター
- 保健福祉事務所
- 児童相談所
- 通園事業所
- 療育機関
- 保育園・幼稚園
- 小学校・中学校
- 教育相談指導学級
- 養護学校
- 子育て支援センター
- 地域育児センター
- ファミリーサポート
- 育児グループ

「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>